

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

Aspects of modern Meisen seen through literary works

関 智子
Tomoko SEKI

1. 研究目的

銘仙は、節糸や紡績糸を用いた平織の絹織物を指すとされる。天明8年(1788)刊『絹布重宝記』や嘉永6年(1853)の『守貞謾稿』¹に「目専」や「繭織」などの表記でみられるように江戸時代から存在し、大正～昭和時代初期にかけて女性たちから大きな需要を得た織物である。大正～昭和時代初期の需要の高まりは経緯糸捺染の技術発達により、自由な模様表現が可能となったことが一因とされており、それまで縞や伝統的な緋模様が主であった銘仙は、次第に多色使いの華やかな模様になっていった。

女性たちの普段着や「ちょいちょい着」²としても用いられた銘仙は、婦人雑誌や百貨店の広告、美人画や雑誌の挿絵等の絵画等を用いて、多方面から研究されている。しかし銘仙は女性のみが使用していた織物ではないことを、『守貞謾稿』の記述から知ることができる。巻13(男服上)と巻14(男服下)にそれぞれ銘仙を男性の略服に分類している記述があるほか、巻16(女服)の女性の略服を説明する項では「繭織、めいせん、あるひはめんせんと訛る。茶地紺縞・紺地茶紺鼠縞等種々。男女これを用ふ。」³と記されており、江戸時代は男女ともに銘仙を略服として着用していたことがわかる。しかし、銘仙の男性による着用についての研究はみられず、男性たちの間でどのように銘仙が用いられてきたのかについて『守貞謾稿』の記述以外に用いられる資料もあまりなかった。本研究では銘仙の歴史の中でこれまで触れられることが少な

かった男性と銘仙の関係について考察していく。

2. 研究方法

本研究では、明治～昭和時代の日本の文学作品や私小説等に見られる銘仙に関する描写を元に、男性と銘仙の関わりについて研究を行う。文学作品に描かれる服飾描写を用いた研究には、石井美奈子による「家族のコミュニケーション手段としての被服類」⁴のほか、十倉加代子による「谷崎文学における服飾表現—谷崎が求めた服飾について—」⁵などが挙げられる。石井が「小説『きもの』は孤高の世界ではあるが、全てが架空・創作のものではなく、大正時代の家族の一断面を探る材料となり得ると考えた。」⁶と述べているように、文学作品の中には作家自身が見てきたものや体験してきたことが落とし込まれており、そこから作品が生み出された時代の様相が読み取れると考えられる。登場人物の人物像を誇張するための表現があったことを加味しても、作品の舞台が遠い過去や未来でない限り、そこに描かれる世相や風俗は当時のものと大きく乖離していないといえる。

文学作品に登場する服飾描写を研究したものには、特定の作家や作品を用いて作中に見られる服飾描写を分析したものがあるが、本研究では複数の作家を対象にすることで作家個人が持つ銘仙に対する主観を客観化し、分析していく。研究を行うにあたり調査の対象とした文学作品は、「青空文庫」⁷にて公開されていた1万7993作品⁸を対象とした。そのうち、「銘仙」や「銘撰」の単語が登場したのは230作品であった。

3. 男性の銘仙着用の実際について

文学作品の描写に見られる男性と銘仙関わりについて触れる前に、実際に男性が銘仙を着用していた様子が伺える記述について触れておく。表1は新聞、表2は私小説や随筆、作家自身が書いた手紙に見られた男性の銘仙着用に関する記述である。

新聞では明治17年～大正15年の間に10件の記載が見られ、その内訳は犯罪等の事件が4件、衣服の流行に関するものが6件である。事件に関する記事では、死体や事件を起こした人物、盗難の被害者が銘仙を着用していたことが書かれていた。

衣服の流行に関する記事では、男性の流行の衣服として複数の着物と共に銘仙の名が並んでいるものが4件、「平常着の銘仙に」というタイトルの中で男子向きの衣服として記述されているものが1件見られる。また、白木屋の広告として、社交服や半襟、婦人靴と共に銘仙の項目が設けられるなかで男性向きの銘仙の特徴が挙げられているものが1件見られた。

私小説等では、明治42年から昭和19年の間に書かれた13作品の中で銘仙に関する描写が見られ、『別れたる妻へ送る手紙』と『着物』以外は全て実在した人物が銘仙を着用している。⁹

男性の銘仙着用について、新聞では大正時代

までの記録しか確認できなかったが、太宰治の随筆と、宮本百合子が夫の宮本顕治に宛てた手紙を見ると、女性の間で銘仙が人気を博した大正～昭和時代初期以降も銘仙を着用していた男性が存在していたことがわかる。

4. 文学作品にみられる男性の銘仙

文学作品では明治38年から昭和19年の間の52作品の中で合計63件の事例がみられた(表3)。これらを、年齢・経済状況・色・模様の4つの視点から考察する。また、考察の際は、同作品・同シリーズ中の同一人物が同一の銘仙を着用している場合は1件として数えている。

4.1 着用者の年齢

未成年の男性の銘仙についての描写は3件みられ0歳、4歳、中学生の着物として登場する。20代であるとわかった例は7件だったが、学生や「若い」という表記のある人物についても20代に含めると13件となる。しかし内2件は借り物で、着用者本人の銘仙ではない。30代であるとわかった例が18件、作中の描写から30代であると推測されるものが4件あった。40代であるとわかった例が4件、作中の描写から40代であると推測できるものが1件あった。50代と60代はそれぞれ1件ずつ、老人であると分かる描写があるものが2件、未成年ではないがどの年代

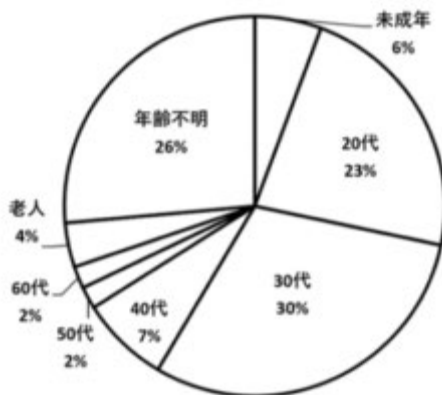


図1 文学作品中でみられる男性の銘仙の内訳（年齢別）

か特定ができなかったものが13件あった。これらを年齢別の割合で表すと図1のようになる。着用者は20～30代の割合が高く、若い層が銘仙を多く着用している傾向が見られた。

4.2 着用者の経済状況

絹織物の中では安価で色柄も多様だった銘仙は、明治時代以降の女性の間では手頃な普段着であり、時には「ちょいちょい着」としても用いることができたとされている。女性については概ね『守貞謄稿』で略服と記されたとおり略服の位置づけであったといえるが、男性においても同様であるかを文学作品中に登場する「普段着」や「晴着」などの言葉から考察する。なお、どのような用途で着用していたのかの表記が無いものは、作中の銘仙の状態に対する描写や、作中から読み取ることのできた着用者の経済状況を元に判断する。

「普段着」の表記がみられたのは明治38(1905)年初出『琴のそら音』、明治42(1909)年初出『それから』の2作品である。『琴のそら音』の靖雄は、神楽坂で七円五十銭の借家に住まい、秩父銘仙を普段着として着用している。作品が執筆された明治38年に近い明治42年の神楽坂近辺の地価をみると、一反当たりの値段が最も高いのが神楽坂2丁目の40円であり、最も安いのが下戸塚町の12円¹⁰である。靖雄は借家といえど、地価の高かった土地で生活していたことがわかる。また、明治40年の東京・公立小学校教員の初任給が10～13円¹¹であったことから、7円の家賃は決して安くない。『それから』の代助は高等遊民であり、作中でも「月に一度は必ず本家へ金を貰もらいに行ゆく。代助は親の金とも、兄の金ともつかぬものを使って生きている。」と書かれるとおり、家族の金で自由に暮らしている。これらのことから、明治時代に銘仙を普段着として着用していた2人の男性は、ゆとりのある生活を送っていたといえる。

「晴着」の表記がみられたのは明治44(1911)年初出『黴』、大正10(1921)年初出『反抗』、

昭和14(1939)年初出『霧の蕃社』である。『黴』では、正一の乳母が宮参りの衣装を銘仙かメリンスで揃えてやりたかったが、お金が無く浴衣地を購入することになったことで正一を不憫に思い涙ぐんでいる。『反抗』では井上周平が師事している横田の妻が、井上の正月着として銘仙の羽織と着物を贈る予定であったという描写がある。井上は大学選科の学生で自家は没落して頼れる親戚もおらず、本や着物も換金したが下宿の支払いもたまってしまっていたという経済状況であった。これら2作品は、経済的に余裕のない人にとって銘仙が晴着になり得た例である。『霧の蕃社』は日本統治時代の台湾で実際に起きた事件をもとにした小説である。物語の中では、台湾で育った花岡一郎が台湾人と日本人の諍いの中で板挟みになってしまい、弟である二郎や妻子とともに自害をする。その際に着用していたのが瓦斯銘仙であった。作中では「一郎二郎及びその家族たちは蕃装をぬぎすてて唯一の晴れ着である日本服を身にまとった。結婚した時、彼らは官憲臨席のもとに、霧社霧ガ丘神社で神前結婚をした。その時内地人に貰った晴れ着である。」とあり、花岡が他の日本服を所持していた場合はそちらを死装束として選んだ可能性が考えられる。また、瓦斯銘仙は本稿で最初に触れた銘仙の定義とは異なる模造の銘仙である。これらのことから、花岡の場合は銘仙であることが晴着として選ばれた理由であるとは言い切れない。しかし、結婚祝いとして贈られる品に模造ではあるが銘仙に似せた生地が選ばれたことは、銘仙の持つ価値として一考の余地があるといえる。

晴着とまではいかないが、銘仙が着用者にとって普段着以上の価値があったという描写が見られたのは大正12(1923)年初出『神棚』、平成5(1993)年¹²『泡盛物語』である。『神棚』で主人公である男が金の工面のために家々を訪ね歩いた際に着ていた一張羅が銘仙である。作中ではこの男の装いに関する描写として「木綿の平素着」が登場することから、普段着として

銘仙を着用していないことがわかる。『泡盛物語』では、主人公の男が職を探し歩く際に「取って置きの銘仙の緋」を着用している。男の経済状況は、職場の金に手を付けて首になったり、母が危篤との連絡を受けても帰郷する金がなかったりするほどだった。この2作品の主人公は、どちらも困窮しており、金を借りたり職をみつめたりするために銘仙を着用し、できる限り身なりを整えようとしていたといえる。

銘仙を着古した描写がみられるのは明治40(1907)年初出『平凡』、『反抗』、大正12(1923)年初出『変な男』、大正15(1926)年初出『モノグラム』、昭和12(1937)年初出『薄紅梅』、昭和13(1938)年初出『在学理由』である。『平凡』の古谷雪江は新進作家として売れ始めてから見栄を張った装いをし、原稿料が入れば贅沢な食事をとるなど、身の丈に合わない浪費をしている。その古谷の着る銘仙に「仮令襟垢たよりの附いた物にもせよ」との前置きがついていることから、垢が付いているといえど、銘仙であるということだけで一定の価値があったのではないかと思われる。なお、『平凡』の中には身なりや家に頓着していない、文壇で有名な大家が登場する。この大家は古谷と初対面した際に「襟垢たよりの附た、近く寄ったら悪臭い匂いが紛としそうな、銘仙か何かの衣服」と銀縁眼鏡を身に付けており、その後の古谷も目も悪くもないのに金縁眼鏡を身に付けていたことから、この大家の装いを真似ていると思われる。

『反抗』で「垢じみた銘仙」を着ている井上は、前述のとおり非常に困窮している。『変な男』で「着くずれた銘仙」を着ていた今井梯二は帝大の文学科に通う苦学生であり、一つ前の下宿先は支払いが滞ったことで追い出されている。『モノグラム』では、栗原一造という老守衛の思い出話の中で「古ぼけた銘仙」が登場する。この銘仙を着ていた当時の栗原は40歳で失業中の身であった。『薄紅梅』のなかで他に着るものが無く「よれよれの銘仙」を着用していた辻町糸七は、作中の描写で「お互に貧乏で、相向つ

た糸七も足袋の裏が破れていた。」とあることから、貧しいことがわかる。『在学理由』で「よれよれの銘仙」を着るおやじは、登場人物の李永泰が書いた小説の主人公で植字工をしている。直接彼の経済状況を示すような描写はみられないが、「若い時は美男だったろうと思われる細長い顔立には、生活の混濁を示すたるみが深く現われ」とあることから、苦労をしながら生きてきたであろう様子が容貌に対する描写から推測される。これらの例から、着古した銘仙を着せられた登場人物たちはいずれも経済的な余裕がない人物として描かれていることがわかる。

これまで挙げてきたものの以外に、銘仙の状態がわかるものは明治43(1910)年初出『泡鳴五部作 放浪』、明治43～44(1910～1911)年初出『青年』、大正5(1916)年初出『うつり香』、昭和2(1927)初出『舞馬』がある。『泡鳴五部作 放浪』では、社長の川崎藤五郎が着る銘仙が粹と表現されている。『青年』では、金は持っているが着るものは質素にしている大石狷太郎が、寝るにも出かけるにも銘仙と兵児帯の組み合わせでいると書かれている。大石の装いを新しいものにせよ「随分質素」であると表現したのは主人公である小泉純一であり、小泉自身も資産家の一人息子として生まれ、食べるために働くことのない身の上である。そうした身分の登場人物の目線からみると、銘仙は質素な衣服にみえるということが読み取れる。

また、大石や『平凡』に登場する大家のように、風変りな人物であることを説明するための材料として、「金をもっているはずなのに銘仙ばかりを着用している」という旨の表現が用いられることから、豊かな人は銘仙を四六時中身に着けることがなかったと考えられる。『うつり香』では二人の人物が銘仙を着用している。柳澤は十円札を束にして懐に入れて歩いているという話があるというほどの男で、娼婦を観劇や食事に連れて行くだけの余裕のある人物であり、新調した銘仙の襦袍を着用している。雪岡

には「私といたら始終自分の小使銭にも不自由をしているくらいだが」という描写があり、自由にできる金があるわけではないが、お気に入りの娼婦の元に通ったり外套を贈ったりする描写などもあることから困窮しているとは言いがたい。この雪岡が着用する銘仙に対する「野暮」という表現は、この直前で触れられている柳澤の新しく立派な装いと比較しての言葉であると推察される。このときの雪岡と柳澤の装いに関して模様についての描写は柳澤のみであるが、色味はどちらも似ていることから、柳澤の装いと比較して野暮と称された雪岡の銘仙との違いは、新調されたものであるか否か、もしくは生地自体の価値の違いによるものと思われる。『舞馬』の峰吉は、植木屋を営むと同時に消防の副小頭も務める50代の男である。峰吉は長いこと酌婦奉公をしていたお八重の前借りを払って後妻として迎えていることから、経済状況は豊かであったと思われる。峰吉が銘仙を身に着けたのは、養子とも居候ともつかない茂助の葬式に向かう場面である。葬式といった場面で銘仙を着用することが適しているかはわからないが、銘仙に組み合わせた紋付羽織袴といういで立ちは礼装の体を成していると思われる。

銘仙の状態に関しては記述が見られないが、作中から着用者の経済状況がわかる作品も多く見られた。まず、ある程度の経済力があつたと思われるのが、明治41（1908）年初出『竹の木戸』、明治42（1909）年初出『半日』、大正2（1913）年初出『帰つてから』、大正9年（1920）年初出『慈悲心鳥』および『真珠夫人』、大正13～15（1924～1926）年初出『伸子』、昭和2（1927）年初出『未開な風景』である。『竹の木戸』で銘仙の襦袍を着て寝そべっている描写が登場する大場真蔵は、経済状況が明確にわかる描写は見られなかったが、自宅の炭を隣の奥さんが盗んでいることに気づいても咎めることをしなかったため、家計がひっ迫するような暮らしではないと思われる。『半日』の高山峻蔵は大学

教授を務めており、起床後に銘仙に着替えて朝食をとっている様子から、銘仙を普段着として用いており、余裕のある暮らしをしていると思われる。『帰つてから』の荒木英也は主人公の夫である静の甥である。荒木はパリに行っていた主人公を迎えに行き、帰宅後に静の持ち物であった銘仙に着替えている。生まれてすぐの末の娘を預けてパリに向かう主人公の心情描写で「里親夫婦が自身達よりも美服した裕福な品のある人達であるのを嬉しく思ひながら」とあるが、6人いる子供それぞれにお土産を買ってきていることや、作中に金銭に困っているような描写がみられないことから、荒木の銘仙の元の持ち主であった静は生活に困るような経済状況でなかったと思われる。『慈悲心鳥』の磯貝満彦は、作中で「財産家の息子で非常の放蕩者」と書かれている。銘仙は磯貝の死体が着用していたものだが、ステッキや金の時計も身に着けており、洒落た装いからは困窮の様子はみられない。『真珠夫人』では、男爵家の次男である青木稔が兄の墓参りの場面で銘仙を着用していた。『伸子』は作者である宮本百合子の体験を元に書かれた作品であり、佃一郎のモデルは士族の養子となった荒木茂である。佃一郎がニューヨークから日本に帰国するための準備として仕立てているのが作中で登場する銘仙である。『未開な風景』では、会社員の油井が銘仙を着用しており、主人公のみのえを連れてデパートや活動写真を観に行っている。

次に、経済的に苦しかったと思われるのが明治40（1907）年初出『野分』、明治43～大正7（1910～1918）年『泡鳴五部作』、大正4（1915）年初出『道草』、大正10（1921）年初出『浮浪』である。『野分』の白井道也は月の収入が35円ほどで、兄に百円の借金をしている。『泡鳴五部作』の主人公である田村義雄は、シリーズの1作目に、樺太で興した事業に失敗し無一文になっている。田村が着る銘仙も樺太にいた際に仕立てられたものである。『道草』の健三は「昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立ってい

た。今の彼は切り詰めた余裕のない生活をしている」という描写が見られ、さらに腹違いの姉姉と、妻の父に経済的な援助を求められている。経済的に余裕がなかった健三であるが、このときに揃いの羽織と着物を仕立てようと購入した銘仙の生地は一匹で10円であり、作品と同じ大正4年の絹織物（武州秩父）1反の価格が5円8銭7厘¹³であることを踏まえると、一匹の銘仙は手頃な値段の品として描かれていると思われる。『浮浪』の主人公は借金があり、当てにしていた知人に宿の支払いをしてもらえず、身に着けていた銘仙と腕時計を質屋にいれようとしている。

以上のように、経済的に豊かな人物たちの着用する銘仙は普段着のように描写されることが多く、葬式の例を除けば特別な場で着用されている描写はみられない。銘仙を晴着のような特別な場で着る衣服として扱っているのは貧しい人物ばかりであった。このことから登場人物の経済状況と、その人物が銘仙をどのような格の衣服として扱っているかが関連付けられていることがわかる。さらに、執筆者の異なる複数の作品で同様の関連付けが見られることから、文学作品内で描かれた銘仙に対する価値観と、実際の銘仙の価値観が同一であったと考えられる。

4.3 銘仙の模様

銘仙の模様に関する描写は、52作品中17件にみられた。また、「派手」「地味」と、模様と色のどちらを指しているかわからないものが1件ずつみられたが、本稿では模様と色の両方を指しているものとして扱う。しかし、大正5（1916）年初出『明暗』で津田由雄が着用している荒い縞の派手すぎる襦袢は、もともと妻の着ていた銘仙を津田が着用するように仕立て直したものであり、男性用の生地ではないため件数として含めていない。

模様は「緋」と「縞」が6件ずつ、「細かい緋」が2件、「荒い」「派手」「地味」が1件ずつみ

られた。明治時代の作品で模様の描写が登場するのは「緋」「地味」であり、大正時代になると「細かい緋」「縞」「荒い」「派手」などの模様が加わってくる。「地味」は『半日』で高山峻藏という博士が起床後に着替えて朝食をとっている場面で着用している銘仙につけられた描写であり、模様の詳細に関する記述はない。「荒い」と形容される銘仙は、『うつり香』の柳澤が着用する新調の厚襦袢である。前述の通り、柳澤は経済的に豊かであるが、粗暴な言動をすることやならずものを意味する「伝法な」という形容動詞がこの厚襦袢につくことから、模様が手柄なものであった可能性が考えられる。また、「派手」は大正14（1925）年初出『老夫婦』に登場する為吉とおしかが息子夫婦から送られた銘仙に使われており、老人である二人にとって派手な銘仙であったとはいえるが、この銘仙が若い男性にとっても同様に派手な銘仙となり得るのかは作中からは読みとれない。

文学作品の中で見られる男性の銘仙の模様は「縞」「緋」「細かい緋」などのシンプルで目立たぬ模様であるのに対し、女性に関する描写（表4）をみると、模様の種類は男性の倍以上に増えている。男性では「緋」が2件みられただけであった明治時代に、10作品の中で「縞」「緋」「あらい縞」「粗い」「矢緋」「棒縞」などの模様がみられた。大正時代以降も、「麻の葉」「中形矢緋」「細く白い雨緋」「格子縞」「派手な縞」「渦巻」「荒い緋」「だんだら」「滝島」「鱗柄」「太縞」「花」「椿」「葉」と多くの模様が登場する。大正時代以降の銘仙の模様の多様さは現存資料からも知られているが、文学作品においても縞か緋かであった男性と比べて女性は模様の種類が多く、大きな模様や植物の模様を使用している。また、女性では「派手」という描写も大正9年以降で12件みられたのに対し、「地味」「質素」「めだたぬ」などの表現をされたものは大正8年以降で8件みられた。女性の銘仙に関しても模様の描写が無いものが大半だったが、派手と対を成す地味という表現が登場するのが同時期であ

ることからも、大正8年頃には女性の銘仙は模様の種類が豊富になっていたと思われる。

男女の模様の違いとしては、『明暗』と昭和21（1946）年初出『黄泉から』の2作品からその一端をうがい知ることができた。『明暗』では23歳の妻の銘仙で作られた襦袍に対して30歳である着用者の津田が、「若い女の着る柄だけに、縞がただ荒いばかりでなく、色合もどっかかというむしろ派出過ぎた」と述べていることから、同じ縞模様でも、男性は女性よりも細い縞を用いていたと思われる。『黄泉から』では、おけいの着る井桁模様の銘仙が男柄であると書かれており、男性向きの模様が存在していたことがわかる。

女性の銘仙が華やかになっていった大正時代以降でも、男性の銘仙の描写には縞や緋以外の模様が登場せず、「荒い」を大柄な模様であると仮定しても1件のみである。また、私小説にみられる男性の銘仙の模様は「細かい緋」「縞」「緋」、新聞では「縦じま」「千筋」「縞」「無地」などであることから、男性は女性と比べて小さく細い模様の銘仙を使用していたと思われる。

4.4 銘仙の色

模様に関する描写は、52作品中で具体的な色名が記述されていたのは10件あり、他に「派手」「地味」が1件ずつであった。色名の描写がなかったものは45件である。¹⁴

明治時代では明治35（1902）年初出『山の手小景』に黄、『明暗』に紺の銘仙が登場している。他に明治42年『半日』で高山が着用する銘仙に「地味」という描写がみられる。大正時代には「白」「茶」「派手」が1件ずつ、「黒」「焦茶」が3件ずつみられるが、昭和時代では具体的な色名が書かれた作品は無い。

白の銘仙を着用していたのは『真珠夫人』の青木稔という20代の青年であり、男爵家の息子である。黄の銘仙を着用していたのは『山の手小景』の「矢来町」に登場する旦那であり、銘仙と合わせた洋杖ステッキや山高帽などの洒落

た装いからは経済的余裕が見て取れる。派手な銘仙は前述したように老夫婦にとっての派手である。その銘仙を購入したのは東京で会社員をしている息子とその妻であり、暮らしぶりからは困窮している様子はみられない。その他の色で貧富の様子ははっきりとわかるものは、黒と焦茶の緋模様の銘仙を着用していた『伸子』の佃一郎¹⁵だけである。他の作品の登場人物たちも着用している銘仙に対し「垢付き」「よれよれ」などの言葉や、生活に困っているような描写がないが、経済状況と着用している銘仙の色に相関関係があるとはいいがたい。

文学作品の中で見られる男性の銘仙の色の多くが暗い色であるのに対し、女性の銘仙については、「黒」「白」「茶」「紺」「茄子紺」「藍」「青」「緑がかった青」「青緑」「水色」「紫」「黒い紫」「薄紫」「黄」「あさぎ」「赤」「朱」「臙脂」と色が明記されているもののほか、「色のややさめた」「くすんだ色」「派手」「地味」「めだたぬ」などの表現もみられた。男性では紺のみが確認できた明治時代も、女性では紺、茶、紫、黄などが使われており、男性と比べ色数が多いことがわかる。文学作品の中では白や黄などの明るい色の銘仙を着用している男性もいたが、私小説にみられる男性の銘仙の色は「茶」「紺」、新聞にみられる男性の銘仙の色も「茶」「紺」「鐵色」などであることから男性の銘仙は主に暗い色が用いられていたと考えられる。

5. 女性の銘仙を男性が使用すること

前述のとおり、男性の使用した銘仙の模様や色は女性のものに比べて模様が細かく、暗い色をしていたと考えられる。しかし、男性が女性ものの銘仙を使用する例が文学作品と私小説のそれぞれに1件ずつみられた。

『明暗』では妻のお延が、病院に入院する際にあまり変な服装をしているのはみっともないからと津田に黙って拵えたものである。布は新たに買ったものではなく、お延のお古で、冬に着ようと洗い張りをしたまま仕立てずにしまっ

ておいた生地を使用している。

『二つの家を繋ぐ回想』は作者である宮本百合子自身の経験を綴った作品であるが、『明暗』のように女性の銘仙を男性のために仕立て直した記述が登場する。「悦ばしく、自分の出来る限りを尽す気持で、派手になった十七八頃の銘仙衣類等を解いて、彼の使うべき夜着になおしたり何かした。」とあり、主人公である百合子が17、18歳頃に着用し、自身にとって今は派手で着られなくなった銘仙を「彼」の夜着に仕立て替えている。彼とは、70歳になるAの父であり、百合子の家に来るAの父のために作ったのがこの銘仙を用いた夜着である。『二つの家を繋ぐ回想』は、昭和56 (1981) 年に刊行された『宮本百合子全集 第十八巻』が初出の作品である。しかし、作中に「それに来年の四月は(一九二三年) 丁度父母の銀婚式にも当るので」との記述があることから、1922年の出来事を記していることがわかる。また、Aは1918～1924年に婚姻関係にあった荒木茂の事であると考えられ、宮本は義父のために自身がかつて着用していた銘仙を仕立て替えたと考えられる。

6. まとめ

男性の銘仙着用に関して、新聞では明治時代中期～大正時代、私小説等・文学作品では明治時代後期～昭和時代前期の描写が見られ、女性の間で華やかな模様の銘仙が流行した大正～昭和時代前期にも男性は銘仙を着用していたことがわかった。そして、ときには女性ものの銘仙を仕立て替えて使用することがあったようだ。

新聞によると男性の銘仙にも流行が存在したようだが、女性の銘仙のように自由な模様表現や鮮やかな染料を取り入れることはなく、細かい柄や暗い色の銘仙を着用していた。また、文学作品の描写から着用者の経済状況によって銘仙を着用する場面が異なり、裕福な人物は普段着や室内着として着用する一方、貧しい人物は晴着や一張羅として銘仙を用いており、実際の女性と同様に文学作品中の男性においても銘仙

は豊かな人から貧しい人まで広く着用されていた様子がうかがえる。

文学作品中の銘仙自体に対する描写は貧しい人物の着用するものに「一張羅」「垢がついた」などの言葉が複数使われているが、裕福な人物の着るものに関しては単に「銘仙」とだけ書かれることが多かった。銘仙が節糸や紡績糸を用いた手ごろな絹物であるといえど、江戸時代以降、主に木綿を着用してきた庶民が日常的に絹を身につけることは誰しもが当たり前であったわけではないと思われる。木綿で作られた綿銘仙の存在からも、そうした庶民の価値観がうかがわれる。そのため、文学作品中でも「銘仙」の表記のみであると、貧しい人物の衣服の表現としては不適当になるのではないかと考えられる。このような銘仙自体の価値については、文学作品中の女性が銘仙を使用する描写も踏まえて今後、考察していきたい。

註

1. 嘉永6年(1853)に成立した江戸時代後期の風俗志。天保8年(1837)～慶応3年(1867)まで加筆された。
2. ちょっとした外出のときなどに着る衣服のこと。
3. 喜田川守貞(宇佐美英機校訂)『近世風俗史(守貞謄稿)(三)』、岩波書店、1999、p67
4. 石井美奈子、『風俗』第33巻 第3号、日本風俗史学会、1995
5. 十倉加代子、『日本服飾学会誌』第14号、日本服飾学会、1995
6. 前掲書4、p32
7. 著作権切れの文学作品を有志が活字化し、公開しているウェブサイト。<https://www.aozora.gr.jp/>
8. 作品数は調査時点(2021年9月8日)で公開されていた作品数。
9. 私小説のうち、『帰去来』については太宰治が10年ぶりに帰郷した時のことについて書いた作品であるため、本研究では主人公である

島津修治を太宰治であるとみなしている。

10. 森永卓郎 監修、『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』、2008、展望社、p204

11. 前掲書10、p395

12. 作者（佐藤垢石：1888～1956）の没後に刊行。執筆年不明。

13. 前掲書10、p395

14. 複数の色が併記されていたものは色ごとに1件と数えている。また、銘仙を着用している人物が複数登場する作品もあるため、作品数と銘仙の描写の件数との数は同一でない。

15. 『伸子』は作者である宮本百合子の体験を元に書かれた作品であり、佃一郎のモデルは士族の養子となった荒木茂である。佃一郎自身も作中でニューヨークに滞在している。

表1 新聞にみられる銘仙の記述

刊行年月日	新聞	見出し	銘仙に関する記述
明治17年 (1884) 4月15日	読売	府下の氷川神社で首つり男 検視後、身元不明で仮埋葬 /東京	年頃三十五六位の男が樗の木にて首を縊り死で (中略) 検視されると衣類は綿銘仙にて茶と紺の縦じまの単衣と 木綿縦じまの袷目利安のシャツを着て (以下略)
明治31年 (1898) 12月31日	朝日	過ぎし三百六十余日 (下)	さて之より少し、本年の流行衣服その他を説かん□夏向 男子衣服としては平御召、高貴織、司織、縞斜子、□一 楽より伊勢崎銘仙、秩父縞等 (以下略)
明治32 (1899) 5月27日	朝日	続流行の夏衣 流行の染色 流行の染模様 流行の縞柄 男子の流行夏衣 婦人の流 行夏衣 夏羽織に就て 帯 揚と下締	△男子の流行夏衣 第一壁糸織 (十二三圓) 第二結城紬 縞は (九圓内外緋は七八圓以上二十五圓位) 第三伊勢崎 銘仙 (四五圓乃至 (ナシ) 七八圓) (以下略)
明治33 (1900) 12月11日	読売	金七千を奪った大泥棒 仕 込み杖で家人を脅迫/東京	銅貨七銭を奪い去りしが其賊の年頃は三十二三位にして 千筋銘仙の着物に黒の外套を纏いフランネルの股引を履 き黒中折の帽子を冠り居りじと (以下略)
明治43 (1910) 2月26日	読売	女柔道家賊を捕らえる 入 湯に赴き浴客の銘仙羽織の 綿入れその他をスリ替えた 男	五犯の中村三郎 (一三) は (中略) 坂田貞臣の七子の銘 仙羽織の綿入れ其他 (代価三十圓) をスリ替えて着込み逃 出す (以下略)
明治43 (1910) 7月3日	読売	電車の客 銘仙ひとえに兵 児帯、煙草ふかして電車運 転、乗客ゾーッ /藤沢	銘仙の単衣に縮緬の兵児帯を占めた一人の客が運転手台 に登りハンドルを握って煙草を吹かせ乍ら運転を始めた (以下略)
大正8 (1919) 4月7日	朝日	男の着物の贅沢加減 女物 より呉服屋が頭を使ふ 縞 紋の流行	「何方かと申せば殿方の方がお召の好みが多いのに考 案致すほうは□□頭脳を悩まします」と呉服やと言ふ、 華やかな女の着物にこそ流行の変遷も著しく目立つが、 燦んだ男の服装にも同じ程度の流行の変化とより以上の 贅沢が見られる、のみならず年々好みも柔弱になって行 く (中略) ◇凝った人に喜ばれるのは□織という一見お召に似た抜 染式の小紋で平生着に贅沢になった近頃は外出着に見栄 えのする様な目先きの変わったゾロリとしたものが好ま れる、裏は羽二重が洒落たものでは錦紗か但し為にいい 処と言えは銘仙であろう、色は茶か鐵色辺り、(以下略)
大正10 (1921) 9月27日	読売	平常着の銘仙に 需要の多 いのは唐棧風の縞柄	男子向きとしての縞柄もいろいろありますが無地もので 羽織に適當なものが出て居ります。
大正14 (1925) 2月27日	朝日	不景気から春着の新傾向 まづ男物の流行調べ	いきな向きとなると、男物にも藍とかえんじとかの色を 見せた物もあり、近頃また江戸趣味の復活などが望まれ ている時ですから唐ざん風の色目柄行き物なども多少喜 ばれて来ています。で品柄はまず結城からお召、大島、 つむぎ、節糸織、八段、あや糸織、銘仙等です。
大正15 (1926) 4月3日	朝日	(広告) 白木屋 社交服 銘仙 半襟 子供服 男児 服 子供帽 中折と鳥打 洋傘 手提 スカーフ	銘仙 どこの家庭にも必要なものとも一般性を持つ銘仙は (中 略) この他に男子ものとしては普通の縞でなくリング応 用の無地風のものや紬風であってあまり光のないものな ど渋いものがあります。

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

表2 私小説等にみられる銘仙の描写

初出・刊行年	作品名・作者	銘仙に関する描写	着用者氏名	執筆者の年齢
明治42 (1909)	『二葉亭四迷の一生』 内田魯庵	その必要からして、官報局を罷めた後の二葉亭は俄に辺幅を飾るようになった。一体衣服には少しも頓着しない方で、親譲りの古ぼけた銘仙にメレンスの兵児帯で何処へでも押掛けたのが、俄に美服を新調して着飾り出した。	二葉亭四迷	33歳以降か
明治43 (1910)	『別れたる妻に送る手紙』 近松秋江	私は、あの古い外套を形に置いて、桜木の入口を出たが、それでも、其れも着ていれば目に立たぬが、下には、あの、もう袖口も何処も切れた、剥げちょろけの古い米沢琉球の羽織に、着物は例の、焼けて焦茶色になった秩父銘仙の綿入れを着て、	雪岡京太郎	30以上か
大正4 (1915)	『硝子戸の中』 夏目漱石	私は黙って座敷へ帰って、そこに敷いてある布団の上に横になった。病後の私は季節に不相当な黒八丈の襟のかかった銘仙のどてらを着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰向に寝て、手を胸の上で組み合せたなり黙って天井を見つめていた。	夏目漱石	48 _{※1}
大正5 (1916)	『茶話 正五(一九一六)年』 薄田泣菫	岡本氏はかういつてその入れたいといふ羽織の襟を指先で扱いてみせた。細かい銘仙の緋で大分皺くちやになつてゐる。	岡本霊華	33 _{※1}
大正11 (1922)	『着物』 芥川龍之介	「君は始終同じ着物を着てゐるから話せないよ。」これは銘仙だか大島だか判然しない着物を着た、やはり年少の豪傑が抛つけた評語である。が、豪傑自身の着物も、余程長い間着てゐると見えて、襟垢がべつとり食附いてゐる。	芥川の夢の中に出てきた人物	年少
大正11 (1922) _{※2}	『二つの家を繋ぐ回想』 宮本百合子	私は、悦ばしく、自分の出来る限りを尽す気持で、派手になった十七八頃の銘仙衣類等を解いて、彼の使うべき夜着になおしたり何かした。	Aの父	70
大正15 (1926)	『火の用心の事』 泉鏡花	暮れから人質に入ひつてゐる外套ぐわいたうと羽織はを救ひだすのに、手もなく八九枚討取うちとられた。黄がかつた紬の羽織に、銘仙の茶じまを着きたのと、石持の黒羽織りに、まがひ琉球のかすりを着きたのが、	泉鏡花	53 _{※1}
昭和14 (1939) _{※3}	『獄中への手紙 一九三九年（昭和十四年）』 宮本百合子	夏ぶとん届きました、白い浴衣も。掛布団届きましたらうか。それから、この春着ていらした袴と同じ羽織（茶っばい銘仙）そちらにはないでしょうね。	宮本顕治	31 _{※1}
昭和16 (1941) _{※3}	『獄中への手紙 一九四一年（昭和十六年）』 宮本百合子	きのう一寸お話の出た綿入れは、大島の羽織、着物、茶じまの下へ重ねて着る分。赤っばい縞の八反のどてら。めいせんのしまの厚いどてらがかえていて、全部でしょう？ これで。それから銘仙の上下おそろいの袴ね。袴は一そろいしかお送りせず、それはかえて来て居ります。	宮本顕治	33 _{※1}
昭和16 (1941)	『服装に就いて』 太宰治	たとえばいま、夏から秋にかけての私の服装に就いて言うならば、真夏は、白緋いちまい、それから涼しくなるにつれて、久留米緋の単衣と、銘仙の緋の単衣とを交互に着て外出する。家に在る時は、もっぱら丹前下の浴衣である。銘仙の緋の単衣は、家内の亡父の遺品である。着て歩くと裾がさらさらして、いい気持だ。この着物を着て、遊びに出掛けると、不思議に必ず雨が降るのである。亡父の戒めかも知れない。 私は、この豪雨の原因が、私の銘仙の着物に在るということを知っていたので すべては、私の魔の銘仙のせいである。	太宰治	32 _{※1}
昭和17 (1942)	『帰去来』 太宰治	北さんは、麻の白服を着ていた。私は銘仙の単衣。もっとも、鞆かばんの中には紬の着物と、袴が用意されていた。	太宰治 (津島修治)	33 _{※1}
昭和17 (1942) _{※3}	『獄中への手紙 一九四二年（昭和十七年）』 宮本百合子	だって私の緋がすりは戸棚に入っているけれど、あなたのお召しになるのがどこにも見付からないという訳で、しかもそちらにあるのかどうかもわからず、とにかく裕羽織とメリヤスの合ズボン下と、銘仙緋がすりを小包にしてどうやら夕飯を食べました	宮本顕治	34 _{※1}
昭和19 (1944) _{※3}	『獄中への手紙 一九四四年（昭和十九年）』 宮本百合子	袴の件。そちらにある銘仙の羽織を前へ出しておいて頂きます。その羽織と着物とを合わせて一枚の着物をこしらえ、羽織は別のにいたします。どうぞお忘れなくね。	宮本顕治	36 _{※1}

* 1. 作者の生誕年と執筆された年を元に算出。作中の描写から年齢を推測したものについては「か」を付けている。

* 2. 刊行年が作者の没後であるため作中に記載のある年に執筆された年として表記。

* 3. 刊行年が作者の没後であるため作品名に書かれた年を執筆された年として表記。

表3 文学作品にみられる男性に関する銘仙の描写

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	着用者氏名	着用者の年齢
明治35 (1902)	『山の手小景』 泉鏡花	旦那、其の夜の出て謂ふは、黄な縞の銘仙の袷に白縮緬の帯、下にフランネルの襦袢、これを長襦袢位に心得て居る人だから、けば／＼しく一着して、羽織は着きず、洋杖ステッキをつけて、紺足袋、山高帽を頂いて居ゐる、脊の高い人物。	旦那	—
明治38 (1905)	『琴のそら音』 夏目漱石	襖の陰に婆さんが叮嚀に畳んで置いた秩父銘仙の不断着である。	靖雄	20～30か
明治40 (1907)	『虞美人草』 夏目漱石	宗近君は貸浴衣の上に銘仙の丹前を重ねて、床柱の松の木を背負、傲然と箕坐をかけたまま、外を覗きながら	宗近	28
明治40 (1907)	『野分』 夏目漱石	道也先生は、あやしげな、銘仙の上を蔽うに黒木綿の紋付をもってして、嘉平次平の下へ両手を入れたまま	白井道也	30代か
明治40 (1907)	『平凡』 二葉亭四迷	家も見窄ぼらしかったが、主人も襟垢の附た、近く寄ったら悪臭い匂いが紛としそうな、銘仙か何かの衣服で、銀縁眼鏡で、汚い髯の処斑に生えた、土気色をした、一寸見れば病人のような、陰気な、くすんだ人で	文壇で有名な大家	—
明治40 (1907)	『平凡』 二葉亭四迷	私は其頃新進作家で多少売出した頃だったから、急に気が大きくなり、それに天性の見栄坊も手伝って、矢張某家のように、仮令襟垢の附いた物にもせよ、兎に角羽織も着物も対の飛白の銘仙物で、縮緬の兵児帯をグルグル巻にし、左程さほど悪くもない眼に金縁眼鏡を掛け	古谷雪江	39
明治41 (1908)	『竹の木戸』 国木田独步	真蔵は銘仙の襦袢の上へ兵古帯を巻きつけたまま日射の可い自分の書齋に寝転んで新聞を読んでいたが	大場真蔵	30代か
明治42 (1909)	『それから』 夏目漱石	代助は縁側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。(中略) 烏打帽を被かむって、銘仙の不断着のまま門を出た。	代助	30
明治42 (1909)	『永日小品』 夏目漱石	婦りにちょっと髻を剃って来るよと、銘仙のどてらの下へ浴衣を重ねた旦那は、沓脱へ下りた。	旦那	—
明治42 (1909)	『半日』 森鷗外	博士は地味な銘仙の二枚襷に、鼠色になつた縮緬の兵児帯をして次の間にすわつた。	高山峻蔵 (博士)	—
明治43 (1910)	『泡鳴五部作 放浪』 岩野泡鳴	不断衣の袷と袷羽織とめりやすいシャツとがある外には、樺太の夏に向きかかつた時拵らへた銘仙の單衣に對の銘仙の袷羽織を着てゐるばかりだ。そして、帽子と云つては、海水浴場で男も女もかぶる様な大きな、粗末な麥わら帽だ。	田村義雄	30後半
		そこへ、社長の川崎がやつて來た。顔は日にやけて黒いままによく磨かれて、綺麗な艶もある。二枚も金齒を入れ、意氣な銘仙の衣物に、同じ地の羽織、白縮緬の兵児帯を締め、指には二つも太い金の指輪をはめてゐる。	川崎藤五郎	—
明治43 ～44 (1910～ 1911)	『青年』 森鷗外	袖浦館の上から下まで、大石の金力に刃向うものはない。それでいて、着物なんぞは随分質素にしている。今着ている銘撰の綿入と、締めている白縮緬のへこ帯とは、相応に新しくはあるが、寝る時もこのまま寝て、洋服に着換えない時には、このままでどこへでも出掛けるのである。	大石狷太郎	—
明治44 (1911)	『百物語』 森鷗外	僕は人の案内するままに二階へ升って、一間を見渡したが、どれどれ知らぬ顔の男ばかりの中に、鬚の白い依田学海さんが、紺緋の銘撰の着流しに、薄羽織を引っ掛けて据わっていた。	依田学海	老人か
明治44 (1911)	『泡鳴五部作 断橋』 岩野泡鳴	義雄が銘仙の單へを袷せにすることを頼みに、近處の仕立物をする婆アさんの家へ行く時	田村義雄	30後半
		義雄自身にも、着どころがいいわけではなかつたが、無頓着な渠には、洋服地の粗末なのや、不體裁なのは左ほど氣にもならなかつた。そして、却つて、新しい物をつけたといふことは、樺太で銘仙の衣物が出来た時と同じ様に、ちよつと氣持ちがよかつた。	田村義雄	30後半
明治44 (1911)	『黴』 徳田秋声	お銀はせめて銘仙かメリンスぐらいで拵えてやりたかつたが、それを待っていると拵える時が来そうにも思えなかつた。	正一	0

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	着用者氏名	着用者の年齢
大正元 (1912)	『行人』 夏目漱石	Hさんは銘仙の着物に白い縮緬の兵児帯へこおびをぐるぐる巻きつけたまま、椅子の上に胡坐をかいて、「珍しいお客さんを連れて来たね」と三沢に云った。丸い顔と丸い五分刈の頭をもった彼は、支那人のようにでくでく肥っていた。	Hさん	—
大正2 (1913)	『桑の実』 鈴木三重吉	婆やは新聞紙の包みを開けて、坊ちやんのお召しになる、銘仙緋の単衣が一枚と、柄のいい真岡の浴衣ゆかたとがちやんと仕立ててあるのを出して、	久男 (坊ちゃん)	4
大正2 (1913)	『帰ってから』 與謝野晶子	英也は何時いつの間にか銘仙に鶺鴒縮緬の袖の襦袢を重ねて大鳥の羽織を着て居た。それは皆静のものであつた。	荒木英也	20代中頃
大正4 (1915)	『ひょっとこ』 芥川龍之介	ひょっとこの面をかぶった背の低い男が、吹流しの下で、馬鹿踊を踊っているのである。ひょっとこは、秩父銘仙の両肌をぬいで、友禅の胴へむき身絞りの袖をつけた、派手な襦袢を出している。	山村平吉	45
大正4 (1915)	『道草』 夏目漱石	番頭に揃いの羽織と着物を拵えるべく勧められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙を抱えて店を出た。その伊勢崎銘仙という名前さえ彼はそれまでついぞ聞いた事がなかった。	健三	36
		彼はまたびかびかする一匹の伊勢崎銘仙を買うのに十円余りを費やした。	健三	36
大正4 (1915)	『うつり香』 近松秋江	柳沢はあの小ちさい体格からだに新調の荒い銘仙の茶と黒との伝法な厚襦袢を着て、机の前にどっしりと跼座をかいている。	柳澤	30ばかり
		柳沢は歳暮にしこたま入った銭の中から、先だって水道町の丸屋を呼んで新調した越後結城が何かのそれも羽織と着物と対の、黒地に茶の千筋の厭味っ気のない、りゅうとした着物を着て、大黒さまの頭巾のような三円五十銭もする鳥打帽を冠っている。私はあの銘仙の焦茶色になった野暮の緋を着て出たまだ。	雪岡	30か
大正5 (1916)	『明暗』 夏目漱石	彼女は後向になって、重ね筆筒の一番下の抽斗から、ネルを重ねた銘仙の襦袢を出して夫の前へ置いた。	津田由雄	30
		羽織を脱ぎ捨てるが早いか、彼はすぐその上へ横になった。鼠地のネルを重ねた銘仙の襦袢をから着せるつもりで、両手で襟の所を持ち上げたお延は、拍子抜のした苦笑と共に、またそれを袖畳にして床とこの裾の方に置いた。	津田由雄	30
		襦袢ははたして宿の方が上等であった。銘仙と糸織の区別は彼の眼にも一目瞭然であった。	津田由雄	30
大正7 (1918)	『泡鳴五部作 憑き物』 岩野泡鳴	義雄は加藤忠吉を停車場の二階なる會計部に訪問し、樺太から着て来た銘仙の衣物と羽織とをこっそり賣つて貰ふことを頼んだ。	田村義雄	30後半
		かう考へて来ると、渠は市中を散歩して見なくなつて、銘仙の袷に銘仙の羽織のまま出かけたが、どうも寒過ぎる様な気がするから、例の乗馬用にした洋服に着かへた。	田村義雄	30後半
大正9 (1920)	『売色鳴南蛮』 泉鏡花	頭毛の真中に皿に似た禿のある、色の黒い、目の窪んだ、口の大きな男で、近頃まで政治家だったが、驕って商業に志した、ために紋着を脱いで、綿銘仙の羽織を衿短に、めりやすの股引を瘦脚に穿いている。	平四郎	—
大正9 (1920)	『慈悲心鳥』 岡本綺堂	磯貝は銘仙の単衣ものの上に紺の羽織をかさねて含満ヶ淵のほとりに倒れていた。 (中略) かれは片手にステッキを持っていたれど、それすらも振廻す暇がなかったらしいという。それは新聞社に達したる通信にて、田島さんの話なり。また、鳥打帽の男の話によれば、磯貝の紙入れはふところから掴み出して、引裂いて大地へ投げ捨ててありしが、在中の百円はそのままなり。金時計は石に叩きつけて打毀してあり。	磯貝満彦	26～27
大正9 (1920)	『真珠夫人』 菊池寛	兄の方は、二十三四だらう。銘仙らしい白い飛白に、袴を穿いて麦藁の帽子を被つた、スラリとした姿が、何処となく上品な気品を持つてゐた。	青木稔	23～24

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	着用者氏名	着用者の年齢
大正9 (1920)	『蒼白き巢窟』 室生犀星	きちんと坐り込んだ顔役は、あさ黒いにがみ走つた唇の色のわるい男であつた。その銘仙の縞ものをきりと襟もとを合したところや、鋭い目つきなど、卑しいところを無理によそはうたところがあつた。	三業組合の 巢靴の顔役	—
大正10 (1921)	『浮浪』 葛西善蔵	私は外套と羽織と時計の三品を出した。「外套は暮に百円で捨てたばかりなんだぜ」「だつて質屋へ持込むとなると幾らも貸しやしないよ。この銘仙の羽織なんか幾らになるもんか。時計は幾ら位ゐたものなんだ？」	私(主人公)	35
大正10 (1921)	『白血球』 豊島与志雄	緋の銘仙の羽織着物に、セルの袴をつけた、三十五六の年配で、頭を五分刈にした、朴訥そうに見える男だった。晋作の頭には、その様子と刑事の肩書とが、別々なものとなって映じた。	中井宇平	35～36頃
大正10 (1921)	『反抗』 豊島与志雄	然し周平は落着かなかつた。明るい電灯の光りに輝らされると、彼女の服装に比べて、自分の垢じみた銘仙の着物が、如何にもみすばらしく思えてきた。	井上周平	20頃か
		実はこの年末に、あなたのお正月着として、銘仙の羽織と着物を差上げるつもりでいました。	井上周平	20頃か
大正12 (1923)	『神棚』 豊島与志雄	このままほんやり歩き続けて、銘仙の一張羅を雨に濡らしてもつまらないし	(主人公)	—
		また一帳羅の銘仙をひっかけていった。	(主人公)	—
大正12 (1923)	『変な男』 豊島与志雄	辰代は言葉尻を濁しながら、相手の押しの強い調子を、図々しいのか或は朴訥なのかと、思い惑った眼付で、先ずその服装を——古ぼけた角帽や着くずれた銘仙の袷や短い綿セルの袴や擦りへった山桐の下駄などを、一通り見調べておいて、	今井梯二	20代
大正13 ～15 (1924～ 1926)	『伸子』 宮本百合子	伸子は、ぶらぶらそこから女中部屋の横へ出た。障子が麗らかに開け放され、すぐ窓際に、女中が向い合いで縫物をしていた。二人ともうつむいて、焦茶地に黒く細かい緋の銘仙男物の着物と羽織を縫っている。それを見ると、伸子は制している感情が、その衣類に向って進るような動揺を感じた。個の着物であった。彼の帰る支度にそうやっていそいで縫っている。	佃一郎	35に見える
大正14 (1925)	『老夫婦』 黒島傳治	「そんな田舎縞を着ずに、こしらえてあげた着物を着なされ。」と、嫁より少しおくれて二階へ行きながら清三が云った。ばあさんは、じいさんの前で包みを開けて見た。兩人には派手すぎると思われるような銘仙だった。	為吉 (じいさん) おしか (ばあさん)	為吉64か おしか 58か
大正14 (1925)	『古井戸』 豊島与志雄	一人の男が階下に訪れてきた。松木が不在だったので、房子が暫く応対をしていたが、やがて二人は庭に出て、古井戸のあたりで立話を初めた。黒っぽい銘仙の着流しに、古縮緬の兵児帯をまきつけた、ひよろ長い半白の老人だった。	半白の老人	老人
大正15 (1926)	『モノグラム』 江戸川乱歩	そうした連中の中では、私の風体は、古ぼけた銘仙かなんか着ていて、おかしい方ですがいくらか立勝って見えたでしょうし、	栗原一造	40
昭和2 (1927)	『未開な風景』 宮本百合子	油井は立ち上って、銘仙の着物の膝をはたくようにした。	油井	30
昭和2 (1927)	『舞馬』 牧逸馬	副小頭の峰吉が、お八重を急がせて羽織袴をつけていた。縞の銘仙に、紋の直径が二寸もある紋付を着て、下にはあたらしいめりやすが見える。	峰吉	50代
昭和3～5 (1928～ 1930)	『己』 谷崎潤一郎	見た瞬間に「美男子やなあ」思ったぐらいな顔だちで、この人も着物ないはずなのに縞銘仙の単衣を着てキチンとしてましたのんは、あとで聞きましたのんですが宿の男衆の着物を一時借りてましたんやそうです。	綿貫栄次	27～28
昭和5～6 (1930～ 1931)	『吸血鬼』 江戸川乱歩	土左衛門は、細かい銘仙緋の単物を身につけていた。その緋に見覚がある。	岡田道彦	36

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	着用者氏名	着用者の年齢
昭和6 (1931)	『ネオン横丁殺人事件』 海野十三	彼は電車道を越えて、大久保の長屋町の方に走りこんだが、それから露地をくねくね曲った末に、「おうの屋」と白字を染ぬいた一軒の質屋へ飛び込んだ。「こないだ預けた銘仙の羽織をちょっと出して貰いたいんだが」	大久保一平	—
昭和7 (1932)	『日本三文オペラ』 武田麟太郎	——軽気球の繫がれてゐるのは、この三階の物干台で、朝と夕方には、縞銘仙の袴つぼの着物を着たここの主人が蒼白い顔を現して操作を行ふ。	—	40過ぎ
昭和9 (1934)	『ひかげの花』 永井荷風	男は立上って羽織も一ツに襲ねたまま壁に引掛てある擬銘仙の綿入を着かけた時、	中島重吉	来年 ^が 厄年
昭和11 (1936)	『石ころ路』 田畑修一郎	「タイメイ」さんは医者のかえりだと言って薬瓶をさげて入ってきた。銘仙の光る着物を長く着て、帯を腰の下の方に結んで、ロイド眼鏡の鼻にあたるところが橋のようになっているのをかけて、顔は島の人に似合わない白さだった。	中島泰明 (タイメイ)	若い
昭和11 (1936)	『猫と庄造と二人のをんな』 谷崎潤一郎	そして男物の銘仙の綿入を、それからせっせと縫いにかかったが	—	—
昭和12 (1937)	『薄紅梅』 泉鏡花	不埒ともいふべき若いのは、想像でも知れた、辻町糸七。道づれなしに心中だけは仕兼ねない、身のまわり。ほうしょの黒の五つ紋(借りもの)を鴨居の釘に剥取られて、大名縞とて、笑わせる、よれよれ銘仙の口綿一枚。素肌の寒さ。まだ雪の雫の干ない足袋は、ぬれ草鞋のように脱いだから、素足の冷たさ。実は、フランネルの手首までの襦衣は着て出たが、洗濯をしないから、仇汚れて、且つその……言い憎いけれど、少し臭う。	辻町糸七	若い 26～27か
昭和13 (1938)	『白い朝—正夫の童話—』 豊島与志雄	正夫は茶の間の縁側に腰をかけて、煙草をふかしました。今日は、銘仙の袂の着物をきています。中学生にしては、銘仙の袂の着物は少し早すぎますが、それは中根のおばさんがさせてくれたのです。	正夫	中学生
昭和13 (1938)	『在学理由』 豊島与志雄	「おやじ」とは周囲の者たちがつけた綽名だ。——四十歳あまりの男で、頭髮はまだ色濃くて硬いが、謂わば丈夫な毛並をむりに間引かれたようで数少く、若い時は美男だったろうと思われる細長い顔立には、生活の混濁を示すたるみが深く現われ、眼だけがへんに生氣を帯びている。季節ものではあるが如何にも古ぼけた帽子、すりへらした駒下駄、よれよれの銘仙の着物、そして髭はきれいに剃っていた。	おやじ	40あまり
		そして彼は、植字工の父親に銘仙の着物をさせたり、同職の息子を、ずっと年若くして律儀な商店員にしたりしたことが、自分でもひどく嫌だったと告白した。	おやじ	40あまり
昭和14 (1939)	『霧の薔社』 中村地平	瓦斯銘仙の単衣を着、白鉢巻を頭に巻いていた一郎は、刃渡り一尺五寸の日本刀で、先ず子供の首をはねた。続いて自ら割腹して、果てた。	花岡一郎	若い
昭和15 (1940)	『三月の第四日曜』 宮本百合子	旋盤工の清水が、「うー、たまんねえナ」と急に茶づけにして、かっこんで、「お婆さんは智者だよ。喉へつかえて腹が忽ちいっぱいだ」まがい銘仙の袴の裾を脚に絡ませるようにして大股に立って行ってしまった。	清水	—
昭和56 (1981)。	『或日』 宮本百合子	髪をちょっと丸めたままの姿で、客間に行くと髪を長くのばし、張った肩に銘仙の羽織を着た青年が後を見せて立って居る。	—	—
昭和62 (1987)。	『帰途』 水野葉舟	S君は銘仙の着物と羽織を着て、中折をかぶっている。着物の裾を端折はしおって、下駄穿きでいる。私は洋服を着て、大きいウルスターを着ている。	S君	若い
平成5 (1993)。	『泡盛物語』 佐藤垢石	私は、そのとき最後に取って置き銘仙の絆を着、駒下駄をはいていたのである。	私(主人公)	30代か

*は執筆者の没後に出版された際の刊行年を記載。初出年不明。
着用者の年齢は作品中に登場する年齢、もしくは年齢を推測可能な表記を記載。作中の描写から年齢を推測したものについては「か」を付けている。

表4 文学作品中にみられる女性に関する銘仙の描写(織・柄・色の記述がみられたもの)

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	織・柄	色
明治36 (1903)	『雁坂越』 幸田露伴	ごく粗い縞の銘仙の着物に紅気べにつけのかなりある唐縮緬の帯を締めた、源三と同年か一つも上であろうかという可愛らしい小娘である。	粗い縞	—
明治40 (1907)	『虞美人草』 夏目漱石	「どうぞ」と誘い込むように片足を後へ引いた。着物はあらい縞の銘仙である。	あらい縞	—
		糸子はようやく手巾を取上げる。粗い銘仙の膝が少し染になった。その上へ、手巾の皺を丁寧に延て四つ折に敷いた。	粗い	—
明治41 (1908)	『鳥影』 石川啄木	静子はそれを避ける様に、ズッと端の方の腰掛に腰を掛けた。銘仙矢絰の単衣に、白茶の縮珍の帯も配色がよく	矢絰	—
明治42 (1909)	『それから』 夏目漱石	三千代は玄関から、門野に連れられて、廊下伝いに這入って来た。銘仙の紺絰に	絰	紺
明治42 (1909)	『半日』 森鷗外	風通の二枚襲の不斷着に、茶縞銘撰の羽織を引掛けた奥さんが	縞	茶
明治42 (1909)	『田舎教師』 田山花袋	ふと、そこに廂髪に結って、紫色の銘仙の矢絰を着て、白足袋をはいた十六ぐらいの美しい色の白い娘が出て来た。	矢絰	紫
明治43 (1910)	『松の葉』 泉鏡花	二重衿の愛嬌づいた、高島田で、あらい棒縞の銘仙の羽織、藍の勝た。	棒縞	藍
明治43 (1910)	『門』 夏目漱石	そうして宗助の持って帰った銘仙の縞柄と地合を飽かず眺めては、安い安いと云った。銘仙は全く品の良いものであった。	縞	—
明治43 ～44 (1910～ 1911)	『青年』 森鷗外	着物も羽織もくすんだ色の銘撰であるが、長い袖の八口から緋縮緬の襦袢の袖が覗れ出ている。	—	くすんだ色
明治43 ～44 (1910～ 1911)	『青年』 森鷗外	お雪さんである。きょうは廂髪を末を、三組のお下げにしている。長い、たっぷりある髪を編まれるだけ編んで、その尖の処に例のクリム色のリボンを掛けている。黄いろい縞の銘撰の着物が	縞	黄
大正2 (1913)	『帰ってから』 興謝野晶子	鏡子は満が想像して大さくなって居なかつた事が実は嬉しくてならなかつたのであつたが、瑞木と花木は其割合よりも大きかつた。さうであるから悲しい涙が零れた。そして紫の銘仙の袴の下に緋の紋羽二重の綿入の下着を着て、	—	紫
大正2 (1913)	『みみずのたばこ』 徳富健次郎	白っぽい堅縞の銘仙の羽織、紫紺のカシミヤの袴、足駄を穿はいた娘が曾て此梅の下に立って	縦縞	白
大正3 (1914) ₁	『日記 一九一四年(大正三年)』 宮本百合子	芸術座の「海の夫人」と「熊」とを見に行く。麻の葉の銘仙に紋ハ二重の羽織を着、袴をはいて行つた。	麻の葉	—
		三月二十五日(水曜) お敬ちゃんが来る。新お召の矢がすりの羽着(ママ)に銘仙のあざぎっぽい着物を着て来た。	—	浅葱
大正3 (1914)	『泡鳴五部作 毒薬を飲む女』 岩野泡鳴	かの女は片ひちを突いて横になり、黄の勝つた中形矢絰の廣島銘仙の綿入れの	中形矢絰	黄
大正5 (1916)	『うつり香』 近松秋江	今日は藍色の地に細く白い雨絰の銘仙の羽織に、やっぱり銘仙か何かの荒い紫紺がかつた綿入れを着ているのが、良い家の小間使か、ちょっとした家の生娘のようで	細く白い雨絰	藍・荒い紫紺
		不斷よく着ていたあの赤っぽい銘仙の格子縞の羽織を着た姿がちらりと眼に浮んだ	格子縞	赤
大正5 (1916)	『箕輪心中』 岡本綺堂	縞の銘仙の一枚は、外記が五つの袴着の祝儀の時にお屋敷から新しくこしらえて頂いたのを、(中略)「女物ではござりますが、奥様のお形見でござります」と	縞	—
大正8 (1919)	『地上 地に潜むもの』 島田清次郎	十七の彼女は短い袴や、装飾をしない豊かな束髪や、質素な銘仙の袖のない着物の下に	質素	質素
大正9 (1920)	『ある日』 田山録弥	姪はその時、銘仙の派手な綿物に、牡丹色の地に何か大きく花の模様の出た帯をしめてゐた。	派手な縞	—

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	織・柄	色
大正10 (1921)	『母』 芥川龍之介	女はそこにさっきから、縫物ぬいものか何かしているらしい。 もっとも後は向いたと云う条、地味じみな銘仙の羽織の肩には、	地味	地味
大正11 (1922)	『星より來れる者』 室生犀星	女が紅い手袋と青いシヨオルと、惱ましげな渦巻銘仙でからだを包んで	渦巻	—
		美しい矢絣銘仙の娘がぼつかりと水に浮くをしどりのやうに現はれてくる	矢絣	—
大正11 (1922)	『十年振』 永井荷風	京都の女の銘仙か節糸織の縞の袷に前掛をしめた質素な小ざつぱりした姿を	縞	—
大正11 (1922)	『雪解』 永井荷風	色系の入った荒い絣の銘仙に同じような羽織を重ねた身なりといい、頤の出た中低な顔立といい、別に人の目を引くほどの女ではないが	荒い絣	色系
大正11 (1922)	『幻の彼方』 豊島与志雄	若い女は顔を伏せていた。羽二重の帯に銘仙絣の着物羽織をつけ	絣	—
大正11 (1922)	『黒髪』 近松秋江	改めて女の方を見ると、いつもの通り、しっとりとした容姿をして、なりも縹わず、不斷着の茶っばい、だんだらの銘仙の格子縞の袷を着て	格子縞・だんだら	茶
大正12 (1923)	『婦人十一題』 泉鏡花	館の奥なる夫人の、常さへ白鼈甲に眞珠を鏤めたる毛留ブローチして、鶴の膚に、孔雀の装ひにのみ馴れたるが、この玉の春を、分わけて、と思ふに、いかに、端近の茶の室まに居迎ふる姿を見れば、櫛巻の薄化粧、縞銘仙の半襟つきに	縞	—
大正12 (1923)	『暮の血』 田中貢太郎	紫の目立つ銘仙かなにかの華美な模様のついた衣服で、小柄なその体を包んでいた。ちょっと小間使か女学生かと云うふうであった。	—	紫
大正12 (1923)	『黒い蝶』 田中貢太郎	滝縞になつた銘仙の羽織の背を見せてゐた女がちよと片頬を見せた。	滝縞	—
大正13 (1924)	『九月一日』 水上瀧太郎	紫矢飛白の銘仙の着物に赤い唐縮緬の帯をした乙子を抱いて、白地に秋草模様のゆかたを着た養子が	矢絣	紫
大正13～ 14 (1924～ 1925)	『痴人の愛』 谷崎潤一郎	僕はナオミちゃんにいろんな形の服を拵えて、毎日日々取り換え引換え着せて見るようにしたいんだよ。お召だの縮緬だのって、そんな高い物でなくともいい。めりんすや銘仙で沢山だから、意匠を奇抜にすることだね	奇抜	—
大正14 (1925)	『第二の接吻』 菊池寛	茶がかつた飛白の銘仙のそろいを着た華奢な身体に、処女らしい美しさが	絣	茶
		京子はある不安にかられて、色のややさめた銘仙の寝衣のまま	—	色のややさめた
大正15 (1926)	『格子縞の毛布』 宮本百合子	彼女の赤い頬べたや、黒くてちぢれた髪に、青々した縞の銘仙着物は	縞	青
昭和3～5 (1928～ 1930)	『孤島の鬼』 江戸川乱歩	それらの景色の中を、二十五歳の子供子供した私が、派手な銘仙に、	派手	派手
昭和6 (1931)	『女客一週間』 豊島与志雄	紫縞の銘仙の着物の襟を合している、それが、年齢より四つも五つも若く、まるで十四五歳の少女のようだった。	縞	紫
昭和6～7 (1931～ 1932)	『鬼』 江戸川乱歩	人間の形をした真赤なものが、黒髪を振り乱し、派出な銘仙の着物の前をはだけて、転がっていた。	派手	派手
昭和6 (1931)	『殺人鬼』 浜尾四郎	婦人は(まともに描写すれば)年のころ二十才前後、極く質素なみなり、羽織も着衣もめだたぬ銘仙のそろいで	めだたぬ	めだたぬ
昭和7 (1932)	『ゴルフ・パンツははいて いまい』 宮本百合子	少くとも銘仙の派手な羽織、彼女の坐っているのはよし古風なコタツであろうとも	派手	派手
昭和7 (1933)	『舗道』 宮本百合子	長めな断髪にコテをあてて耳のまわりへ捲きあげ、みどりは、黄色い薔薇のような半衿に、派手な銘仙の着物を着ている。	派手	派手

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	織・柄	色
昭和8～9 (1934～1935)	『悪霊』 江戸川乱歩	その縞銘仙の単衣ものの中には、クシャクシャになった夫人常用の絞羽二重の長襦袢が	縞	—
昭和9 (1934)	『三人の双生児』 海野十三	春子女史は、薄もので拵えた真黒の被布に、下にはやはり黒っぽい単衣の縞もの銘仙を着た小柄の人物で	縞	黒
昭和9 (1934)	『髻』 宮本百合子	古い縞銘仙のはんてんを羽織り、小さく丸めた髪に鼈甲べっこうの櫛をさしているお豊が	縞	—
昭和9 (1934)	『彼は昔の彼ならず』 太宰治	妹は二十歳前後の小柄な瘦せた女で、矢絣模様の銘仙を好んで着ていた。	絣	矢絣
昭和9 (1934)	『彼は昔の彼ならず』 太宰治	「うちの女です。よろしく。」青扇は、うしろにひっそりたたずんでいたやや大柄な女のひとを、おおげさに頸でしゃくって見せた。僕たちは、お辞儀をかわした。麻の葉模様の緑がかった青い銘仙の袷に、やはり銘仙らしい絞り染の朱色の羽織をかざねていた。	麻の葉・絞り染	緑がかった青・朱
昭和9 (1934)	『女の首』 田中貢太郎	女はこっちへ白い面長な顔を見せた。銘仙かなにかであろう、紫色の模様のある羽織を着て	—	紫
昭和9 (1934)	『草薺の中』 田中貢太郎	二十二三に見える長手な顔をした淋しそうな女で、白っぽい単衣の上に銘仙のような縦縞の羽織を引っかけていた。	縦縞	—
昭和9 (1934)	『銭形平次捕物控 歎きの菩薩』 野村胡堂	襟の掛った少し地味な銘仙、襦子の帯、三十近い身柄ですが、美しさを声の韻から言うと、せいぜい十九か二十歳でしょう。	地味	地味
昭和9～10 (1934～1935)	『人間豹』 江戸川乱歩	人気女優江川蘭子は忽然としてこの世から消えうせ、その鏡台の前に立っているのは、安銘仙の縞物にメリンスの帯をしめ	縞	—
昭和10 (1935)	『乳房』 宮本百合子	ひろ子は、髪を編下げにし、自分に合わせては派手な貰いものの銘仙羽織を着て	派手	派手
昭和10～13 (1935～1938)	『仮装人物』 徳田秋声	葉子は何か意気な縞柄のお召の中古の羽織に、鈍い青緑と黝い紫との鱗形の銘仙の不断着で、	鱗形	青緑と黒い紫
		葉子は黙ずんだ碧と紫の鱗形の銘仙の不断着にいつもの横縞の羽織を着て、大きな樹一杯に咲きみちた白木蓮の花影で二三日にわかに明るくなった縁側にいた。	鱗形	碧・紫
		葉子は珍らしく、家へ帰るとすぐ鱗型の銘仙の不断着に着かえ	鱗形	—
昭和10～13 (1935～1938)	『なぐさめ』 林美美子	ジープに乗ってゐる娘がゐてね。ほんの一寸すれ違ふ時だつたが、それが清子にいきうつしでね。茶色の服をきてゐたんで違ふんだが、三月の晩は、紫色の銘仙のもんべを着てゐたんだから、違ふ事はたしかだ	—	紫
昭和11 (1936)	『坂田の場合』 豊島与志雄	彼女の無難作な束髪や紫地に太縞のお召銘仙の着物を	太縞	紫
昭和11 (1936)	『少女地獄』 夢野久作	私は只今のような両親の話を洩れ聞きました夕方、御飯を戴きますと間もなく、お友達と活動を見に行くとして、お母様から買って頂いたまま、まだ一度も袖を通した事のない銘仙の、馬鹿馬鹿しいくらい派手な表現派模様の袷を着まして	派手	—
昭和11 (1936)	『銭形平次捕物控 小便組貞女』 野村胡堂	お扇はすっかり興奮してをりますが、言ふことは思ひの外筋が立ちます。地味な銘仙の袷に	地味	地味
昭和11 (1936)	『帯広まで』 林美美子	細君のであろう派手な銘仙が壁にぶらさがっている。	派手	派手
昭和11～12 (1936～1937)	『落葉日記』 岸田國士	彼女は飽くまで和服主義とみえ、パーマメントをかけた断髪にぐつと、襟をつめた大柄の銘仙が	大柄	—

文学作品を通して見る近代銘仙の様相

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	織・柄	色
昭和12 (1937)	『棺桶の花嫁』 海野十三	いつものように、女学生らしい下げ髪に直していた。紫の矢がすり銘仙の着物を短く裾あげして	矢緋	紫
昭和13 (1938)	『姥捨』 太宰治	妻にもコオトがなかった。羽織も着物も同じ矢緋模様の銘仙で	矢緋	—
昭和14 (1939)	『汗』 岡本かの子	矢がすりの銘仙に文金の高島田。そこに一点の羞恥の影も無い。松崎は眼を落して娘の掌を見た。	緋	矢緋
昭和15 (1940)	『三月の第四日曜』 宮本百合子	呉服部のところで、ケースの上にくりひろげてある絹セルや夏物柄の銘仙をちょっとさわって見たりしながら、「これ、本当に銘仙なんかしら」	夏物柄	—
昭和18 (1943)	『かへらじと 日本移動演劇連盟のために』 岸田國士	明子は、わりに派手な銘仙にモンペといふ姿。	派手	派手
昭和21 (1946)	『黄泉から』 久生十蘭	おけいは別れにきた。茄子紺の地に井桁を白く抜いた男柄の銘仙に、汚点ひとつない結城の仕立おろしの足袋という	井桁・男柄	茄子紺
昭和21 (1946)	『来訪者』 永井荷風	臙脂色の目に立つ大柄模様の銘仙に、薄色襦袢の事務服を羽織代りにした細面の、年は二十五六。もとは高島屋デパートの売りだったといふ木場の妻よし子である。	大柄	臙脂
昭和21 (1946)	『世相』 織田作之助	マダムの妹がすっとはいつて来た。無器用にお茶を置くと、黙々と固い姿勢のまま出て行った。紫の銘仙を寒そうに着たその後姿が	—	紫
昭和21 (1946)	『古木』 豊島与志雄	花模様の銘仙の着物に、海老茶の袴を胸高にしまして、髪をおさげにしていました。	花	—
昭和21～ 22 (1946～ 1947)	『播州平野』 宮本百合子	ひろ子は、二階で、愈々どっさりになって来た布類、衣類の干ものをしつづけた。しげのつましい親たちが、何年か前にこしらえてやった派手すぎる銘仙の晴着や	派手	派手
昭和22 (1947)	『二つの庭』 宮本百合子	素子が、そういいながら、紫檀の角机へ縞銘仙の袴のひじをついた。	縞	—
		関西風に袖の短い銘仙袴をきて、頸根っこに重くまるめた髪をこちらに見せ、机に向っている素子の横姿が	緋	—
		自分だけは、姉とちがって薄紫の銘仙の単衣を着て、人絹であるけれど	—	薄紫
		白地銘仙の着物に友禅の昼夜帯をしめ、そのどっちにもたたみめがなかった。	—	白
昭和22 (1947)	『花火』 太宰治	「矢緋の銘仙があったじゃないか。あれを着たら、どうだい？」 「いいわよ、いいわよ。これでいいの。」心の内は生死の境だ。危機一髪である。	矢緋	—
昭和23 (1948)	『ヘアーピン一本』 豊島与志雄	まだ二十歳前の年頃のように、銘仙らしい着物やモンペは、縞柄はじみだが清楚な感じで、人造革の小型なボストンバッグを一つさげていた。	縞	—
昭和25 (1950)	『孤独者の愛』 豊島与志雄	縞銘仙の着物をきているが、料理屋の女中というよりは……煙草屋の娘	縞	—
昭和26 (1951)	『刻々』 宮本百合子	娘は、派手な銘仙の両袖をかき合わせるようにして	派手	派手
昭和26 (1951)	『死因の疑問』 豊島与志雄	赤い椿の花を大きく散らした銘仙のついの着物と羽織、真赤なメリンスの帯。それを清さんはいへん嬉しがって、お正月から着初めました。	赤い椿	赤
昭和26 (1951)	『銭形平次捕物控 万両分限』 野村胡堂	二十一、二の女、夕陽に照らされて、クワッと明るく美しいのを平次は、絵に描いた遊女のように艶めかしく眺めました。地味な銘仙、赤いものを嫌った半元服。全く非凡という外はありません。	地味	地味
昭和27 (1952)	『花と籠』 火野葦平	姉妹ということがすぐわかる、色白の丸顔で、どちらも、緑の葉模様の地味な銘仙を着ていた。	緑の葉	地味

初出・執筆年	作品名・作者	銘仙に関する描写	織・柄	色
昭和27 (1952)	『絶縁体』 豊島与志雄	あちこち継のあたってる銘仙の着物で、早く亡くなった母親の遺物なのであろうか、黒っぽいじみな柄であって	黒っぽい 地味な柄	—
昭和49 (1974) _{*1}	『小町の芍薬』 岡本かの子	少女はや、黄味がかつた銘仙の矢絣の着物を着てゐた。	矢絣	黄み がかった
昭和49 (1974) _{*2}	『かの女の朝』 岡本かの子	荒い銘仙絣の単衣を短かく着て帯の結びばかり少し日本の伝統に添っているけれど、あとは異人女が着物を着たようにぼやけた間の抜けた着かたをして居る。	荒い	—
昭和56 (1981) _{*2}	『蛋白石』 宮本百合子	千世子は茶っぽい銘仙のびったり体についた着物を着て	—	茶
昭和56 (1981) _{*2}	『芽生』 宮本百合子	水色の様な麻の葉の銘仙に鶯茶の市松の羽織を着て匹田の赤い帯をしめて、髪はいつもの様に中央から二つに分けて耳んところでもりボンをかけて居ました。	麻の葉	水色
昭和56 (1981) _{*2}	『千世子』 宮本百合子	あんまり仰山な着物より気のきいた柄の銘仙の上に縮緬の羽織をかけたのが一番気持がいいと口ぐせに云って	—	気の きいた柄

*1. 刊行年が作者の没後であるため作品名に書かれた年を執筆された年として表記。

*2. は執筆者の没後に出版された際の刊行年を記載。初出年不明。